

---

# 黄泉の国と蘇の国

他靡 慈姑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄泉の国と蘇の国

### 【Zマーク】

Z2658F

### 【作者名】

他靡 慈姑

### 【あらすじ】

自分で読みたいような小説を書いていきたいと思っています。

～読む必要のないところ～

江戸時代末期

黒船が世の中を

騒がせていたこの時代に

この俺、 杜邊月 蘇芳トベツキ ソウ

は命を落とした。

死因は餓死

武士の身分を、もつはずの俺は

武士は食わねど高楊枝といふ言葉の如く

貧乏でひもじくなりながら

それでもなお

毅然とふるまつていたら

あっけなく死んでしまった。

命を落としたのち四十九日間

俺は魂や靈という存在になつて

自分の葬式を見て

この世の思い出の場所をめぐつて

俺は黄泉の世界にその存在をおこした。

黄泉の世界に間際、

不思議と俺はまたこの世界に帰つてくる気がした。

時は流れる

黄泉の国にいる俺にその流れを感じる「とはできないが

きつと人がよみがえるための妖術かなにかを

成功させることができるような時代にまた、なったのだろう。

俺はまた、俺が餓死した世界にまた戻ることになった。

あの落とした命を、またもや拾われたようだ。

「ひつて俺は白い壁に囲まれた部屋で田を覚ます・・・。」

～読む必要のないトピック（後書き）

IJHは読む必要がありません

## ～電話・武度田の復活參度田の誕生～

俺が目を覚ました部屋ではまざ、

とても清潔な白い天井が見えた。

そういうえば、前起きた時は何が見えつたっけかな・・・？

俺はこじれまた清潔で白いベッドから

体を起こし周りを見渡した。

するとやはり、白い壁に囲まれていた。

見たといひ、扉のようなものはない。

どうせつて、おれはここに運ばれたんだ・・・？

そうだ、前起きた時は土壁に囲まれていたな・・・。

そんなことをぼんやり考へてみると、

その部屋が白い壁に囲まれただけの部屋でないと気がつくった。

それはベットから降つよ!としたとき、気づいた。

いや、気づかないとバカみたいになつていたるわ。

その部屋には、

床がなかつた。

俺の下には、真っ暗でじりまで続いているのか分からぬ

闇が広がつてゐる。

つてか、ベットが浮いてる……。

ベットの下を見ていると、まるで自分が自分でない気がしてくる。

あまりに真っ暗過ぎて自分が飲まれそうになる。

その光景があまりにビリジョウも無むを過ぎて

その光景があまりにも滑稽過ぎて

その光景がくだらないくらい愉快過ぎて

「・・・・・っくっくっく、アハハハハハッハハ！！」

俺は笑いだした。

笑つて、笑つて笑つて

愉快で不快でつまらなくて

痛快で楽しくて不愉快で

笑つて、笑つて、笑つて

笑つて、ベットから飛び降りた。

腹部に殴られたような感覚を受け

俺は、悲壮な悲鳴をあげた。

「 ぐふううあああああああ！」

そう簡単には失われることなく

そつは思ったもの

何度もだつてなくしてゐるよ。

ああ、どうせ、一度無くした命だ。

間違いなく馬鹿だろい。

俺は馬鹿じゃないのかな？

ベットの約下方5メートルで俺は停止した。

「精神が不安定のようだな・・・。

まあ、実験段階ではよくあつたことだ。」

「どうかともなく・・・

否、まるで俺の頭から直接聞こえるかの如く男の声がした。

「なんだよ・・・誰だよ・・・何の用だよー。」

「ふむ・・・アタッククオーター先鋒の刃は江戸時代末期のDNA記憶をもとに作  
たはずだ  
が

こんな言葉づかいをするのか？

それとも、何かのミスで間違えたのか？

頭から直接話しかける男の声は、少し考え込むような間を開けて、  
こう聞いてきた。

「おこ貴様、名を名乗れ。」

「杜邊月 蘇芳だ！」

「つむ、間違つてはいないようだが・・・

江戸時代末期の言葉づかうとは違う気がするな。

わからない・・・やはうれは・・・ブツブツ・・・

頭に直接話しかけるようなこの男の声は、何だかわからないことを

小声でつぶやき始めた。

ふざけゐたじやねえよ・・・。

わからぬこのせいかの方だよー。

「おー。俺の頭ん中で“いやいや”が叫んでるやつー。」

次は俺がいろいろ聞か出す番だ。

「なんだ？」

「とつあえず、俺を自由な体勢にしろ

この姿勢はな何かときつこんだよー。」

その時の俺の姿勢は、腹部だけを支えられ

手や頭の上半身と足の下半身が垂れ下がったよつた、

誰がどう見ても痛々しことしか言こよつがない姿勢だつた。

「ああ、やつだな。」

頭に直接話しかけるより話す男の声は、納得したよひに至った。

すると、俺の体は上昇しもといたベットのところに着地した。

「ふう・・・つと、よし、おー！」

いろいろと俺にも説明してもらいたいことがあるんだが？」

俺は特に意味はないが大声でそういった。

「説明か・・・その仕事は、ほかの者がやる。

あと数十秒後にそのまま部屋につくだろう。

私もお前とだらだらと話していくのはどうでもいいしな。」

「え?・・・おーーーみよー！」

急に頭から直接話しかけるような男の声は聞こえなくなった。

そのかわり、

これこそどこからともなく

俺の前に、髪を一つに結わいた白衣姿の女が現れていた。

女は、手元の資料を読み上げる

「 杜邊月 蘇芳、アタツククオータ 先鋒の刃ノ N O · 0 8 7 6 4 。」

「なつ・・・。」

「そして、罪人。」

今回の黄泉帰りも面倒なことになつそうだ。・・・・・。

～第三話・シヌタメ～（前書き）

あらまし・蘇つた主人!・どうなる?

## ～第弐話・シヌタメニ～

俺、否、拙者<sup>せつしゃ</sup>が生前の自分称だつたらしいが

今の俺は「俺」と言つた方がしつくらじくる。

で

その俺は白衣姿のポーテールねえちゃんに

今回びりじて俺が黄泉<sup>よし</sup>がえつたかの説明を受けた。

「まあ、とりあえず実験台<sup>めんば</sup>。・08764

あなたは、要するに実験台よ。まあ」

・・・・・・。

ここつと会話するのは骨が折れそうだ・・・。

「しかも、残念なことに成功作よ。まったく・・・残念。」

「成功したのに残念なのかよ。」

「うへん、そうね。私の私事をはむと残念なのよ。私事。」

白衣の女はわざとじりしく首を横に振り。

やれやれと言つた仕草をして見せた。

「それに、8764回も実験してたらいい加減、成功するものよ。8764回も。」

「……………。」

「ああ、ちなみにあなたの体を提供していただいたのは

某王国出身の兵隊さんスワーくんです！ちなみにだけどね。」

「俺の体はとっくに朽ち果てるだらうからな。 兵隊？」

「そう！現在戦争中なのよ。 そう！」

なんかこの白衣の女テンションあがってきてないか？

「その死にざまはかつこよかつたよー！

バカみたいに、でかい武器を持つて、バカみたいに突っ込んで

バカみたいに死んだのよ。バカみたいな死にざま。」

バカにしてるじゃないか……。

「戦いくさもとい戦争せんそうつて」とは、

俺はその戦争のために黄泉こうせんがえつたとかか?」

「さすが、成功作! 察しがいいね、勘が働くね!」

あなたは、戦争で死ぬために黄泉こうせんがえつたんだよー。さすがー。」

シヌタメニコミニガエッタ

ま、どうでもいいのだが……。

「ところで、女、なんで俺なんだ？」

「女、じゃなくて、名前があるのよ。玖礼<sup>クレイ</sup>っていう名前がね、女じやなくて。

なんつていうか、伝説というか、お告げといつかで、

ある7人を黄泉<sup>ヨウゼン</sup>がえらせる必要があつたのよ。なんていうかね。」

「7人・・・・・？」

「あなたが最後の一人よ。あなたが

「俺が最後の一人・・・・。」

「でも、あなたもう一人を残して全員死んだけどね。あなたと一  
人」

「

はあ？」

「あつ、もうこんな時間、続きは8時間後にするね。こんな時間。」

「いやいや、まだ聞きたいことがたくさんあるんだよ。

なんだよ死んだって、なんだよ先鋒<sup>アタッククオーター</sup>の刃つて、

なんだよ伝説つて つー? 「

「そんなことは、第3話で明かす必要はないでしょ。そんなこと・・・

・・・・・・・・

「 つー?」

田の前が

。

ゆうくつと

。

真っ暗に

。

•  
•  
•  
○

～第3話・シヌタメニ～（後書き）

中途半端で終わるーなんて嫌な小説！

～第参話・出撃だよ出撃～（前輪や）

ひよひと惣屋開

## ～第参話・出撃だよ出撃～

それは突然のことだった。

「出撃だよー出撃！」

きつかりハ時間。

俺の腕についている。

マネージメントクロック  
管理時計 | (寝る前に説明を受けた) に、よつて熟睡していた俺  
は

白衣姿の女の声で目が覚めた。

注意しておぐがナース服ではなく白衣だ。

何の役にも立たない注意だったかもしけないけど・・・。

「さつさと起きる。さつさとー！」

この白衣姿の女。もとい玖礼は、  
クレイ

俺を起こすと、「そんじやあ出発だよ。そんじやあ。」とい

ワープした。

・・・・・・・・。

ワープした？

俺と一緒に？

テレポートの間違いでは？

この際どちらでも一緒に？

俺は、床がないのにもかかわらず、

浮いているのか、下に実は床があるのかわからないベッドの上から

消えうせた。

ワープした。

ワープって……。

と・に・か・く！

今俺がいる場所は、武器庫のよつなどい。

日本刀や長巻、薙刀、弓矢がたくさんある。

俺の時代にみた城の武器庫と同じようなところだ。

「蘇芳くんがどんな武器を使うかわからなかつたから

江戸末期に使われていたような武器を集めてみたよ。蘇芳くん。」

「…………。」

「あれれ？ どうしたの？ 江戸末期だから、鉄砲が欲しいとかかな？ あれれ？」

「ああ、とりあえず、鉄砲も欲しいが、まず説明が欲しい。」

俺は今から戦<sup>一<sub>くわ</sub>ん</sup>に出るのか？」

「そうだよ。だから、出撃つて言つたし、

だから、武器庫、かつこ、江戸時代末期、かつこ閉じ、に来たんだ  
よ。そうだよ。」

・・・・・・なるほど・・・・。

やつこひことなら・・・・。

久々に愉快になってきたぜ。

俺は、近くにあった日本刀と短刀をとり、

腰に

。

「…………。」

今頃だが

俺は服を着ていなかつた……。

「あ、服なら、あつちにあるよ。服なら。」

俺は玖礼<sup>クレイ</sup>が指さした方向にある。

服を適当に選び。

刀を帯刀した。

「鉄砲も欲しい。」

「どんのがいい？ 最新のビームライフルもあるけど、

坂本竜馬が使っていたようなのもあるよ。どんのがいい？」

「最新びいむ？ 坂本竜馬？ どうでもいい、俺の時代のやつを出せ。」

俺は鉄砲を受け取り。

「準備できたぜ。」

「それじゃあー出発ーじゃあー」とい

ワープした。

・ . . . . . .

ワープした?

俺と一緒に?

テレポートの間違いでは?

この際どうでも一緒にでは?

デジヤブな感じを受けつつ

戦場に降りたつた

。

～第参話・出撃だよ出撃～（後編）

でも展開は遅い。

（前書き）

「第肆話：孤独一人」

ちょっとバトル

（第肆話・孤独一人）

ここは戦場

戦場はいつだって孤独だ。

たとえ味方の軍がいようとも

戦うのはいつも一人だ

今だつてそうだ。

目の前にはざつと三十近くの敵

見方は俺独りぼっち。

・・・・・・・?

三十近くの敵はユニークな形の武器うしきものを持っている。

俺はなまくら刀と時代遅れの鉄砲。

・・・・・・・?

ナマクラ刀はとうに折れ

時代遅れの鉄砲は弾切れ

その上俺は敵には囮まれ

・・・やれやれだぜ。

おかしいなんでこうなったんだ・・・?

ワープして・・戦場にきて・・・

味方がいないって聞いてなくて・・・

時代遅れの銃で先制攻撃をしたら、

思つた以上に敵が多くて・・・

そのうえ死ぬ前の全盛期より体が動かなくて・・・

弾は切れるは、刀は折れるは、心も折れそうだぜ・・・。

俺はもつと強いんだよお・・・。

「どうした、得意のSFチックな能力は使わないのか?」

敵のリーダー格の男が、おれをそんなふうに罵つてきた。

SFチックな能力?

白衣ポニー<sup>クレイ</sup>テールの女こと玖礼とかが使つてた能力か？

「その能力って何だよ！？」

「ああ？とぼけるなよ！？てめえらは戦争の理由も忘れたのかあ？」

リーダー格の男はハン！と笑い。

「一人で飛び込んできたと思ったたら、とんだお笑い草じゃねえか！」

と、言うと持っていたユニークな形の武器で

俺の息の根をとめるべく襲いかかってきた。

俺は間一髪、右に身をひるがえしかわす。

ところどころのユニークな武器

形はユニークとしか言いようがない。

使い方はこれもまたユニークとしか言いようがない。

伸びたり。

割れたり。

増えたり。

光つたり。

まあ、ここまで言つても、

大多数の人が解らないだろうと我ながら思った。

説明べただ。

そんな下らなくユニークなことを考えていくうちに

俺は、つまづき転び

あおむけに倒れた

。

さよなら人生。

これで三度目。

人に殺されるのは、一度目か・・・・。

俺が見上げて見えるのは

リーダー格の男。

そいつはユニークな武器で・・・

・・・・・

俺に

・・・・・

とどめを

ひゅうび押しつらあんじゅうでもするみつこ

一か所に集まり、

次の瞬間には、その男を含む

俺の目の前の30近くの敵は吸い込まれるように

ふと、俺は計り知れないほど恐怖を感じた。

驚愕していた。

俺が見上げていた男は、

・ · · · · · · ?

・ · · · · · · ·

否、そんな甘つたるいものではなく

万力にでもかけられているかのように

やがてそれは、耐えられなくなつたかのように

潰れた。

俺の周りに鮮明な血が飛び散る。

もはや肉塊と、化した『それ』は、未だに縮小し

人一人分の大きさになると無造作に地面に落ちた。

俺はただそれを口を開けてみているしかなかつた。

すると、肉塊に近づく人影があった。

「老若男女容赦なし、それが戦場でのこのアタシのポリシー。」

女性の声だった。

声というのとは、ちょっと違ひ。

田を覚ましてすぐ聞いた男のよつに

頭に直接語りかけてくる。

「あ、あなたは・・・？」

いつもの自分に似合わず謙譲的な言葉遣いになってしまった。

「このアタシ? そんなの決まってる。」

一呼吸置き。

「伝説の七人が内一人。穢れの「こ」と、レジドンダエンドアキタ禊琥子

(こ)だ。」

俺は計り知れないほどの恐怖を確信だと知った・・・・・・・・・。

（第肆話：孤独一人）（後書き）

新キャラ登場

「第伍話・失敗と失敗」（前書き）

久々の投稿

## （第伍話・失敗と失敗）

「なんちゅーか、信じるのは救われるつていうけど、アタシが信じるのは、アタシだからアタシ自身は救われるだろ？」「ね？」

そこで彼女は、もはや原型をどぎめでいい敵兵を見るのをやめ、僕の方を振り向き言った。

「【創造の友】<sup>メイクオーター</sup>、【不止の病】<sup>ウォーターカオーター</sup>【空振】<sup>ミスホワイト</sup>【発狂】<sup>マッドグリーン</sup>【真芯】<sup>ミドルレッド</sup>、彼ら彼女の名前をあなたは知っているだろ？」

いやいや、しらねーよ

何それ。

そんな俺を無視して、禊琥々と名乗る彼女は続ける。

「大三元と四界人で構成されるアタシたち七つの失敗のうち二〇七七七である、

アタシより前に生まれた5人　つまり、さつき5人の名前の人はこのあたし自身の強さの証明のために消えてもらった。」

なんだかわからんが、こいつが俺が寝る前に玖礼が言つてた伝説の七人とかを壊滅させたやつだつてことがわかつた。

こんなクチの悪い女が助けて……くれたのか？

望んで黄泉帰ったわけではないが、命が残つてるのはうれしいこと

だぜ。

あれ?

でも、までよ・・・。

これは良く考えなくとも分かる気がするが、今までの5人をどうにかしたんだから

こんど、この奇天烈女が次に取る行動は

ブウウン

何かが空を切る音がした

その音より早く俺の体は後ろに身を翻した。

やつぱり・・・。

なんだ今の?

見えなかつた・・・。

「一般にあとからできたモノのほうがよく出来るもの、だから5人を消すことができたことは当たり前。でも、あなたはまだ経験が足

りない、実績が足りない、功績が足りない。言つてゐる意味わかる?」

「ワーラン

さらに後退する。

また何かが空を切る音がした。

相変わらずそれが何なのは分からぬ。

「消すなら今がお買い得だつてことだよ」

そう言つて、襷はゆっくつと歩きて近づいてくる。

どうあるよ。

・・・・・ん?

死んでいいんじゃねえのか?

三度目の死亡だ。

何度も生きるのは疲れる。

悪くない。

そつやつて腹をくくると、俺はその場に座り込んだ。

「なんのつもりだよ。」

櫻琥々は、特に気にしていないように尋ねた。

「もう人生は一回経験した。よく分からないうことに利用されるなら死んだ方がましだ。」

「へえ、イサギいいじゃねえか。嫌いじゃないぜ、そういうの。」

「ふつ・・・。」

「じゃ、遠慮なつ・・・・?」

その時、櫻琥々の前に俺はいなかつた。

「時間切れかよ。」

彼女は一人ただそうつぶやいた。

～第5話・失敗と失敗～（後書き）

めんどくせこ言葉をこつぱに出してみたよ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2658f/>

---

黄泉の国と蘇の国

2010年11月16日18時44分発行